

王白淵の東京留学について

とう こううん
唐 顯芸

はじめに

第1節 東京留学の経緯——『人間文化の出発』をめぐって

第2節 東京時代の王白淵——美術から文学へ、文学から政治へ

おわりに

(要約)

本稿は、王白淵が1945年11月から4回にわたって『政経報』に連載した「我的回憶録」を中心に、『蕨の道』における謝春木の序文と王白淵の論文を参考にしながら、その東京留学について考察し、東京時代の王白淵における思想と生活上の変化を解明する試みである。第1節では、その留学の経緯について、きっかけとなった本は工藤直太郎の『人間文化の出発』である可能性を提起し、内容の考察を行った。王白淵のミレー憧憬について、当時のミレー・ブームの中で形成されたという論点を提起した。第2節では東京美術学校での学習と当時日本の社会環境や中国革命、インド独立運動などが与えた影響について論じた。

はじめに

1931年6月、王白淵(1902-1965)は台湾新文学史上初の日本語詩文集とされる『蕨の道』を盛岡で出版した。彼は当時、岩手女子師範学校に勤めていたが、1932年9月に左翼団体「台湾文化サークル」に参加したことで検挙され、同年、女子師範学校を免職された¹。この検挙を始め、王白淵は二つの統治政権において政治犯として逮捕されること五回にわたり、詩文集のタイトル通りの人生を歩むことになる²。

そもそも王白淵が「台湾文化サークル」に参加したのにも『蕨の道』の出版と関係があった。王白淵は本書の出版によって、林兌、呉坤煌らと文通を始め、プロレタリア芸術運動に関する意見を交換し、「プロレタリア的文化組織」の促進と助成を目的とする「台湾文化サークル」を結成するに至ったといわれている³。王白淵はさらに文化サークルの後身とされる「台湾芸術研究会」にも参加した。柳書琴によると、思想と文学創作の面でメンバーに大きな影響を与えた⁴。

『蕨の道』は王白淵唯一の詩文集であり、日本に来てから創作した詩66首、論文2篇、演劇の台本の翻訳と短編小説一本ずつが収録されている。その詩は難解であり、陳芳明がいうように、王白淵の左翼思想を見いだすことは困難である⁵。詩作の解説及び王白淵の思想を理解するためには、まず王白淵の経歴、特に『蕨の道』収録の諸作品が執筆された東京と盛岡時代の生活状況を知る必要があると考えられる。盛岡時代に関しては、小川英子と板谷栄城の「盛岡時代の王白淵について」によって明らかにされているが、東京時代に関しては柳書琴、橋本恭子らの先行研究はあるものの、留学する経緯や東京美術学校での生活などについて、まだ不明な部分が多く残されている⁶。

本稿は、王白淵が1945年11月から4回にわたり『政経報』に連載した「我的回憶録」（中国語）を中心に、『蕨の道』における親友の謝春木の序文と王の論文（共に日本語）を参考としながら、王白淵の東京留学について考察を試みる⁷。

第1節 東京留学の経緯——『人間文化の出発』をめぐる

1. きっかけとしての『人間文化の出発』

王白淵は「我的回憶録」の中で、東京留学した経緯を以下のように述べている。

そのとき、たまたま工藤好美氏の『人間文化の出発』と題する書籍を購入した。この芸術の才に富んだ日本の自由主義者が、私の人生を決定づけることになった。そのうち数篇は私に深い感銘を与えた（中略）。植民地——征服された民族と帝国主義者の残虐の間に対立が絶えない社会。全ての事業は日本人の手に握られていた。台湾の同胞には全く出口がなく、知識階級はみな高等遊民となりはて、医学を修めた者だけが少々出口を見いだしているのみだ。このような歴史環境のなか、私は煩悶し、恨みを抱きつつ、最終的に台湾のミレーとなつて、象牙の塔の中で一生を過ごしたいと思うようになった。こうして私は油絵を研究し始めたのである。

一年後に少し進歩を感じ、社会も私が相当な美術の資質を持っていると認めてくれたので、東京で美術を専攻しようと思いついた。（中略）結局総督府の留学生として東京へ行き、東京美術学校に入った。しかし台湾のミレーになりたいと思っていた私は、ミレーになれなかったのみならず、美術そのものに満足できなくなり、美術から文学へ、文学から政治、社会科学へと進んだ。それから私の半生は苦悶、闘争と受難に満ちたものとなったのである⁸。

（下線は引用者による。以下同様）

冒頭の「そのとき」とは王白淵が台北の国語学校師範部を卒業してから、溪湖の公学校で教師として一年間勤務した後、五年ぶりに故郷二水での生活を始めた頃である。しかし、彼は久しぶりの故郷に馴染めなかった。引用した文の直前には「社会の苦悶を知った私は、暖かい家庭で普通の生活を過ごすことが出来なくなった……内心の苦悶は日に日に深くなっていた」と述べられている⁹。

「社会の苦悶」とは何を指しているのか。同じ文章の冒頭に、王白淵は溪湖の公学校での生活について、以下のように述べた。

私は男子四年生の担任になった。このころの私はひたすら教育に対する情熱を持ち、毎日楽しく仕事をし、よく子供たちと遊んだ。非常に幸福なようでもあった。しかし現実の社会が、台湾には明らかに抑圧する民族と抑圧される民族の存在があることを教えてくれた。

日本人と台湾人の溝——この消滅しがたい対立は、日に日に私の目の前に立ちはだかるようになった¹⁰。

王白淵は抑圧する日本人と抑圧される台湾人の対立に苦悶を感じていたというのだが、対立とは具体的になにを指していたのだろうか。謝春木の以下の言葉が参考になると考えられる。

二年間に君は社会的苦難を随分舐めさせられていた。血液の相異で、事毎に差別待遇をされる時の腹立たしさ、理不尽の××（筆者注：原文のまま）等で、鏡のやうに澄んだ君の気持に密雲が集つて来た¹¹。

つまり「社会の苦悶」とは、具体的には職場で差別を受けたことによって、王白淵が思い知った植民地台湾の社会状況を指していると考えられる。台湾の現実に日に日に苦悶を感じていた彼は、工藤好美の本に出会い、東京留学を決めた。

王白淵のその後の人生から考えて、留学の決定は大きな転換点になったといえるだろう。これについて、彼自身は以下のように語っている。

一昨年台北で、二十年前に私の人生を大きく変えた工藤好美氏に会った¹²。そのとき彼は台北帝国大学に英文学の助教授として勤めていた。来て十六年になるという。ある宴席で私は彼にこういった。「工藤先生、私は二十年前、大作『人間文化的出発』を拝見してから、東京へ芸術を研究しに行きました。それからの人生は波乱に満ちたものになりました。先生には感謝すべきでしょうか、それとも恨むべきでしょうか」。彼は首を振り、少し笑って、黙って何も言わなかった¹³。

『人間文化的出発』との出会いこそ、王白淵の波乱な後半生の出発点となったといっても過言ではない。王白淵にこれほど大きな影響を与えた本はどんなことが書かれていたのだろうか。

しかし、工藤好美の著作を調べたところ、中国語の『人間文化的出発』に対応しそうな書物は見当たらない。さらに、初めて出版された工藤の著書は1924年の『ペイタア研究』である¹⁴。王白淵が留学した1923年以前に¹⁵、工藤好美の著書を目にした可能性はほぼ皆無といえよう。その上、管見の限りでは工藤好美の著作と王白淵が言及した『人間文化的出発』の内容との間には、一致するところが全くない。以上から考えると、王白淵が読んだのは工藤好美の著作とは考えにくいのである。

それでは、『人間文化的出発』は一体誰が書いた、どのような書物なのか。調査の過程で浮上したのは、1922年に大同館書店より出版された工藤直太郎の『人間文化の出発』である。

書名が訳語とほぼ一致している上、時期的にも妥当であり、内容においても王白淵の言及と合致している。次にその内容について検討していきたい。

2. 『人間文化の出発』の内容

『人間文化の出発』で感銘を受けた箇所について、王白淵はこう語っている。

そのうち数篇は私に深い感銘を与えた。原始人の夢——理性以前の世界、混沌たる生命感覚、未分岐の人生などが、私に芸術の秘密を教え、芸術に対して未自覚だった意欲を呼び起こした。ドストエフスキーの人間苦の一篇は、精神と物質、永久と死滅、キリスト教思想とギリシア思想の対立など、人生の二元世界の存在を教えてくれた。私もまた明らかにこのような人生の二元的相克を内心に感じたのである。

なにより、ミレー礼賛の一篇がやがて私の人生を大きく転回させた。これはもちろん母親から受け継いだ美術の素質にも関係しているが、ミレー——この偉大なるフランス近世画家の清らかな人生に、非常に感銘を受けたのも関係している¹⁶。

『人間文化の出発』は1922年の春、工藤直太郎が30歳を目前に、エディンバラ大学に留学する前に出版したものである¹⁷。全書は22章で構成され、「人間愛に生きる社会を創造せねばならない」という考えに基づいて、英米文学、ロシア文学、哲学、宗教に関する知識を縦横無尽に駆使した持論が展開されている¹⁸。

次に、王白淵が言及したいいくつかのテーマを本書と照らし合わせて考察してみよう。

まず、「原始人の夢」とは、第22章「原始愛に生きる芸術」の部分だと考えられる。この章には「芸術の還元性」という副題がつき、さらに、(1)人間に対する思索、(2)神と人間、(3)嬰兒のころ、という三つの部分に分かれている。

(1)ではホイットマンを中心に、「彼は生まれながらにしてミステックであった。ミステックとは人間に対し、自然に対して、最も強き感情を持ち得る人である」(404頁)と述べ、さらに「この強き感激を表現するのはすべて詩である。ロダンは大理石に詩を彫った。ミレーは暗い色彩を以て画布の上に詩を描き出した」(405頁)といい、人間を強く肯定し、愛することを表現する芸術家たちを賛美した。(2)では、ギリシア思想の中にキリスト教に対する異端思想を見いだした上、「霊と肉との交響曲は我等は小兒に於て見出す。小兒は神と獣との象徴である。原始時代の美はしきはそこにある。こゝに原始愛の無限性が存する」(413頁)といい、子供に人間の原始愛を見いだして、人間の魂の帰るべきところであると論じた。(3)の部分では、この論点をさらに展開し、ピカソ、ミレー、ゴッホ、ホイットマンなどの例を挙げ、「原始愛への復帰はあらゆる至醇なる芸術の辿るべき道である」(417頁)と述べ、「生命が最高度の理想に対する感激に燃えるときに、そこに天才が生ずる。天才は愛の力である。愛はまた創造である。芸術的天才の活動するところ、生命の原理は到るところに現はれる」(419頁)という結論に達した。

この章で、人間が理性を持つ以前の原始的な状態を賛美し、それが詩や絵画などの芸術に表現されていた時に最高の作品となると論じているところは、王白淵の叙述と一致している。キリ

スト教とギリシア思想の対立についても論じられているし、なによりこの章の精神の有り様と表現の方法に、王白淵の『蕨の道』の詩と共通する部分があると認められる¹⁹。

次にドストエフスキーの人間苦に関しては、主に第 15 章「知識階級の貧民と人道主義」と第 20 章「ドストエフスキーを憶ふ」で論じられるほか、別の章でも繰り返し言及されている。特に第 15 章では、ドストエフスキーの貧しい生活に言及し、日本に大文学が生まれないのは多くの文学者が経済的に困窮しているのに由来するという説に反論し、「日本に大芸術が現れぬのは、文学者は単に経済的に貧民であるのみではない（中略）先づ彼等の智識的貧民、即ち思想上の貧民を思想上の富者とすることが緊要事である」（315 頁）、「故に偉大なる芸術品の創造は単に物質的生活に左右せらるゝものではない（中略）芸術活動の強弱深淺の度は一にその人の精神的強弱如何の度に比例するのであって、物質の貧乏と一致するものではない」（317 頁）と述べた。人間の精神の豊かさと物質の豊かさは必ずしも一致するのではない。精神と物質の対立に言及する一方、偉大な芸術は豊かな精神に由来すると論じた。

二元世界の部分については、第 11 章「人間生活の二表現」が中心だと考えられる。この章には「古代希臘の文化とニーチェの解釈」という副題がつき、ニーチェが『悲劇の誕生』で論じたギリシアの文化について論じるものである。その中の(6)「本能の陶醉と人間苦」では、「希臘人に取っては、性の象徴はあらゆる象徴の中で最も崇敬されたのである」（235 頁）、「然るにニーチェはこの見地より、基督教の性的関係の解決を攻撃して、基督教は人間本能の神聖なる衝動生活の解放と拡張に対して、徹底的に反抗して、憎悪して、永遠の生命を創造する性的活動を不浄なるものとし、悪徳とし、陰蔽すべき闇黒面と見ている」（236 頁）と述べ、ギリシア文化とキリスト教の差異を論じた。その上、「永遠の生命、永劫の生の回帰は、高韻幽玄のダイオニソスの生命の音楽に旋律するのである（中略）生命の勝利的肯定は死滅と衰頹と束縛とを憎悪し、そして出産と性の神秘とを通じて、現実生活は生命の歡喜の集力的持続となりて、永遠に宇宙意志につながる」（236 頁）といい、永生と死滅について論じた。

以上、内容（ミレーの部分を除く。この点については後述する）、書名、時期などを総合的に考えるに、王白淵が読んだのは工藤直太郎の『人間文化の出発』と確定できよう。

そうだとすれば、回想録での記述は、王白淵の記憶違いに由来するという結論になる。なぜこのような間違いが起こったのか。筆者は工藤好美と工藤直太郎二人の経歴に相似する部分が多いことが原因だと考える。

まず、工藤好美（1898-1992）は 1921 年に早稲田大学文学部英文科に入学し、24 年に卒業したあと、28 年に台北帝国大学に助教授として赴任し、西洋文学講座を担当した。一方、工藤直太郎（1894-2000）は 1916 年に早稲田大学文学部英文科を卒業し、22 年にイギリスに留学、30 年に帰国した後、早稲田高等学院の教員を経て早稲田大学の教授になった。二人は苗字が同じだけではなく、年齢も近い上、同じ早稲田出身の英文学者である。王白淵が『人間文化の出発』を読んでから二十年を経て、偶然台北で早稲田出身の英文学者である工藤好美に会い、記憶を辿っていくうちに間違いが生じたのではないだろうか。

しかし、一番の核心ともいえる問題が残っている。『人間文化の出発』には「密列禮讚」(ミレー礼賛)という章がないだけでなく、ミレーについての言及は、最終章の中の二箇所しかない。王白淵の回想と不一致がある上、台湾のミレーになりたいと思わせるほどの影響を与えたとは考えにくい。また『人間文化の出発』には現在のところ、ほかの版本の存在は確認されていない。ミレーに関する論説はこの本に収録されておらず、王白淵の記憶違いと考えられるだろう。それでは、王白淵のミレー憧憬はどこに由来したのか。これについては次に考察したい。

3. ミレーへの憧れ

王白淵が「台湾のミレー」になろうとした理由について、羅秀芝は以下のように推論した。

社会主義者といわれたことのある画家ミレー、その作品は農家の生活を描き、高度な精神性の持つ不滅の特質を呈し、古典的な牧歌のような心情を帯びていて、植民地の青年が容易に共感を覚える部分を持っている。当時、もう一人の台湾青年洪瑞麟もミレーの作品に惹かれ、当時流通していた画集に倣い、「ミレーデッサンの模写」を描いた(略)。王白淵の習作はもう見る事が出来ないが、1924年の洪瑞麟のデッサンから、王白淵のミレーに対する似たような共感の心情を推測することが出来るかもしれない²⁰。

当時ミレーの画集が台湾で流通していた上、デッサンを模写するほどミレーに傾倒している青年がいた状況を考えると、王白淵もミレーの絵に接し、ミレーとその絵画についての情報を容易に手に入れることができたかと推測できよう。

そもそも日本において、美術学校の現場でミレーが初めて紹介されたのは1876年であるが、一般大衆に広く認識されたのは20世紀に入ってからである²¹。1902年『美術新報』に「画傑みれ一伝」が9回連載されたのを皮切りにして、画集、伝記などが相次いで出版され、人気を集めた²²。王白淵が留学を考え、実行したのは、まさに「大正から昭和の初期にはミレーに関する単行書籍が頻繁に出版され、『ミレー・ブーム』ともいうべき活況を呈する」時期である²³。

ミレーがその時期に広く受け入れられたのは、例えば1921年に創刊されたプロレタリア文学雑誌が『種蒔く人』と命名されたことから窺える。階級の対立が顕著になった大正、昭和期に、ミレーの絵にみえる大地に根ざして素朴で懸命に生きる農民の姿が、急速に進められた近代化に、社会の矛盾を感じる人々の共感を得たからであろう。

しかしミレー絵画以前に、ミレーとその絵画に対するこのような受け止め方が規定されたのには、ミレー伝記の影響がある。最初ミレー伝記本は、1881年にパリで出版されたアルフレッド・サンスイエの『ジャン＝フランソワ・ミレーの生涯と作品』である。本書はまさしく「道徳、宗教、清貧、農民」のミレー像を作り上げ、定着させた原点といわれている²⁴。本書はフランスでの出版に先駆け、1880年にアメリカで『ジャン＝フランソワ・ミレー、農民にして画家』と改題されて翻訳出版された²⁵。この改題について井出洋一郎は「『農民画家ミレー』としてイメージアップする効果が絶大であった。その路線は十九世紀末から二十世紀初頭のミレー評価を決定

づけることとなる」と指摘している²⁶。さらに、ロマン・ロランが 1902 年にロンドンで出版した『ミレー』はミレーの伝記をより一層「英雄的な『偉人伝』」に仕立てたといわれている²⁷。本書は 1914 年に『ミレー評伝』の題で日本語に翻訳されて以来長く愛読され、日本におけるミレー観に大きな影響を与えたというのである²⁸。

以上見てきたように、当時の日本におけるミレー受容は、英語圏で流布されていたサンスイエ、ロマン・ロランなどの伝記本によって作り上げられた人道主義的な農民画家であるミレー言説に影響されていたといえる。

そういう背景の中、1917 年の『新小説』に有島武郎の「ミレー礼讃」が載せられた²⁹。この長文は 7 節に分かれている。第 1 節では「ナポレオンがエルバ島に流謫された 1814 年に生まれ、仏蘭西共和国の憲法が制定された 1875 年に 61 歳で世を去つた巨匠ジャン・フランソア・ミレーを礼讃する為にこの筆は執られる」とのみ書かれ³⁰、第 2 と 3 節はミレーの伝記、第 4 節はミレーの語録、第 5 節以下は有島の総合的な分析となっている。第 5 節では都市生活と近代文化の結びつきが人々の生活にもたらした影響を述べ、ミレーが「原始的と称せられる農民の生活の中」に「寛大と、勤労と、平和と、**resignation** と、愛の根とを見出した」と論じた³¹。第 6 節では自然と人間の関係を論じ、「真実な地点の確立、自然と自己との徹底的な交渉、それは天才のみが成就し、享樂し得る境涯だ。ミレーはそれを完成した——彼れの誠実と熱愛と忍耐と勤労とを以て、不遇と、貧窮と、病苦と死との恐ろしい地獄を経めぐった後に」と結論づけ³²、第 7 節ではさらにミレーの絵画の音楽性について論じている。

有島武郎は執筆の依頼を受けてから、妻と父親の死という打撃にあい、さらに多忙を極める状況にしながら、あきらめることなく評論を書き上げた。その理由はミレーに対する強い共感もあるが、この時期が有島自身の作家としての転回点に当たっており、ミレーの生涯を語ることを通して自身の芸術観を述べ、作家として再出発する決意を持っていたのだといわれている³³。有島の読書記録から、彼がこの評論を書く前にサンスイエやロマン・ロランなどのミレー伝記本を読んだことが分かる³⁴。実際、有島のミレー論は上述の「清貧にして芸術に身を捧げたミレー像」を踏襲しているといえよう。

王白淵が有島武郎の「ミレー礼讃」を読んだかどうか確認する術はなく、回想録で感銘を受けたという「ミレー礼賛の一篇」が有島武郎の文章を指しているかどうかは断定できない。ただ有島の一文におけるミレー像は王白淵の憧憬と一致していることは認められるといえるだろう。そして、具体的な経路は不明だが、王白淵のミレー憧憬は、まさにそのようなミレー言説がブームになっていた時代の中に形成されたと考えられる。

以上、王白淵における東京留学の決定に至るまでの過程を考察してきた。次節では彼が画家の夢を捨て社会運動家へと変化した東京時代について考察することにしたい。

第2節 東京時代の王白淵——美術から文学へ、文学から政治へ

1. 東京美術学校の生活

1923年、王白淵は東京美術学校の図画師範科に入学した。

1923-25 (大正 12-14) 年版の『東京美術学校一覽』によると、当時の学科は本科と図画師範科に分かれ、本科には日本画科、西洋画科、彫刻科、建築科、図案科、金工科、鑄造科、漆工科及び写真科が設けられていた。本科の修業年限は5年(写真科は3年)であるのに対し、図画師範科は3年である³⁵。図画師範科の入学資格は、師範学校または中学校の卒業者及び専門学校入学者検定規程によって、試験検定に合格した身体健全品行方正の男子である³⁶。師範学校卒業者は入学願書などのほか、地方長官の承認書を添付する必要があった³⁷。更に台湾と朝鮮の学生にも適用する「外国学生特別入学規程」があり、それによると、入学志願者は外務省、在外公館または本邦所在のその国の公館の紹介があるものに限り、詮議の上入学を許可すると決められていた³⁸。国語学校師範部を卒業した王白淵が「総督府の留学生」となり、東京美術学校に入学したのは、以上のような規程に従った結果と考えられる。

東京では謝春木がすでに東京高等師範学校に在学しており、二人は神田今川小路に住んでいた³⁹。入学したばかりの頃について、王白淵は次のように述べている。

桜がまさに散ろうとする頃だった。美術学校は上野公園の中にあり、東京音楽学校と隣接していた。この二つの芸術の殿堂はともに東京の丘、草木が青々と茂っている公園の中にある。私は非常に満足していた。(略)東京は意外にもいいところで、さすがに世界の五大都市の一つであるだけのことはあった。文化はもちろん台湾よりも高い。しかし私が特に満足していたのは、生活の自由と研究の自由であった。(中略)東京にいても、日本警察による陰日向の監視は免れないが、台湾ほどひどいものではなかった。毎日一緒にいる日本人も、植民地にいる日本人のように偉そうな顔をしていない。私は日本人に親しみを感じ、日本文化に魅力的なところがあると感じるようになった。毎日きちんと学校へいき、ひたすら美術を研究していた⁴⁰。

台湾とは全く異なる生活に対する青年王白淵の高揚した心情が、二十年後に書かれた回想録からでも確かに伝わってくる。

美術学校ではどんな勉強をしていたのか。規程によると、図画師範科の学課目は修身、教育学、心理学、教授法、教授練習、美学、美術史、図案法、色彩学、英語、絵画、図案、用器画法、製図、手工、習字及び体操である⁴¹。

更に、各科授業要旨では以下のように書かれている。「図画師範科は、普通教育に従事する図画科教員を養成するを以て主旨となすが故に、技術家たると同時に、教育者たるの学識品格を養はんがため、各科に課する共通学課の外、教育学及心理学、教授法、図案法及色彩学、用器画法、英語、教授練習を課し、実技は自在画、手工、習字を課す」⁴²。実技の自在画とは、以下の

ような授業が行われた。「自在画において、木炭画、鉛筆画、毛筆画、水彩画などとし、石膏模型、標本、実物に依りて、陰影、濃淡及び色彩を授く、其方法は写生を主として、兼ねて見取り及び考案の力を練習せしむ。第二年、第三年に至りては、塗板上の練習を加へ、第三年はとくに教授練習を主として、初等教育より中等教育に至る教案の編成を行はしむ」⁴³。

日本画科、西洋画科と比較すると、日本画・西洋画実習や、解剖学、遠近法など、絵画の技術に関する基本の授業がない。その代わり、教育に関係する科目が多くを占め、絵画の授業も教授法の練習が主である。つまり図画師範科では、画家になる訓練ではなく、あくまでも美術教師になる訓練が行われていた。のち王白淵が岩手女子師範学校及び台湾の大同工学院で行った美術授業の内容をみる限り、美術学校での訓練は非常に役立つものだったといえる⁴⁴。

このような授業内容はミレーになろうと志した王白淵にとって、理想と大きく離れていたかもしれない。しかし、図画師範科で勉強したことが、王白淵が画家にならなかつた、あるいはなれなかつた原因とは言い切れない。彼が三年生のときに、同じ図画師範科の二年に在学していた陳澄波と廖繼春が、その後台湾画壇で有名な画家になったことから考えても、師範科での勉強は必ずしも画家への道を閉ざしたとはいえないだろう。

王白淵が結局画家とは異なる道に進んだ理由は、ほかにあると考えられる。

2. 政治への目覚め

東京に来て間もなく、王白淵の生活に変化が起きた。

しかししばらくして、私の目は開いた。周囲の環境、世界の潮流、特に中国の革命とインドの独立運動は、私の不滅の民族意識を猛烈にわき上がらせた。芸術——この万人が抱いている美しい夢は、私の内心の要求を満足させることができなくなった。象牙の塔の中の夢は、もちろん人生の理想であり、感情豊かな私の好みでもあった。しかし、一つの民族が異民族に屈し、牛馬のような生活を送っている時に、いかなる人も自分の幸福と利害によってこの歴史の悲劇から逃れることはできない。私はこのように考え、自分の良心に問いかけた。それから毎日上野図書館へ行き、この問題の根本的な解決のために研究しようとした。しかし私は芸術からも離れられなかつた。この魅惑的な妖姫は、まるで毒蛇のように絶えず心に居座っていた。芸術と革命——この二つの道は両立できそうにないまま、目の前に広がっていた⁴⁵。

同じ頃の生活について、同居していた謝春木はこう述べている。

美術学校に於ける君は憂鬱そのもので、画よりも詩を研究し、台湾人の運命を下宿屋の二階で夜明迄語つたのは一度や二度ではなかつた⁴⁶。

二人が知り合った国語学校の頃に、謝春木がすでに政治に関心を示していたのに対し、王白淵は無関心だった⁴⁷。前述したように公学校の教師になってから差別を受け、植民地の現実を身を以て知ってもなお、政治に対しては漠然とした考えに留まっていた。回想録では、以下のよう
に記されている。

蒋渭水さん（この民族の先覚者、彼は確かに台湾民族の英雄である。彼は死ぬまでひたすら大衆だけのために、少しも軟化せず、少しも妥協せずにいた）が率いた初期の文化協会は、確かに多くの圧迫された大衆を呼び起こした（中略）。私は彼等の志に深い共感を覚え、特に蒋さんの人格に感服してはいたけれども、彼等の運動には参加しなかった⁴⁸。

留学する前の王白淵は社会運動に理解を示しながらも、実際に関わろうとはせず、象牙の塔の中で一生を過ごすような画家になりたいと思っていた。しかし、その決意は東京に来て大きく揺れ始めた。原因にはまず「周囲の環境」の影響がある。

彼が東京にきたのはちょうど大正末期にあたる⁴⁹。大正時代は民主主義と自由主義の思想が台頭し、政治、社会、文化など様々な面において、改革運動が展開された時期であった。王白淵は台湾では考えられなかった開放感を味わい、生活と研究の自由を満喫しながら、様々な思想による刺激を受けていた。更に、彼は東京に来て半年も経たないうちに、東京の風貌とその自由な空気を大きく変化させた出来事に遭ったのである。

1923年9月1日に、関東大震災が起こった。当時東京美術学校は夏休み中であり、建物の損害も軽かったが、東京各地に火災が発生したため、学校の所在地に近い上野公園は最大の避難場所となった。その後群衆は更に集まり、美術学校自体が避難民収容所と化し、二か月間休校となったのである⁵⁰。

関東大震災がもたらしたのは、実質的な損害のみならず、精神面にも大きな衝撃を与えた。その上、朝鮮人決起に関する噂が広がって、虐殺事件が起こり、大杉栄ら社会主義者が惨殺されるなど、衝撃的な事件が次々起こり、大正期に大きく進んだ社会主義運動も停滞した⁵¹。

このような社会状況に直面した王白淵はどう感じていたのか。記録された資料が全くないため断言できないが、少なくとも、自然災害がもたらした破壊、その破壊がもたらした人心の崩壊、激化する階級と民族の対立などについて思考するきっかけが与えられたに違いない。象牙の塔の夢から政治に目覚めたのには、まずこのような社会状況が背景にあったと考えられる。

王白淵はさらに世界の潮流に目を開き、特に中国革命とインド独立運動に関心を寄せた。

3. 中国革命、インド独立運動とタゴールの影響

当時の王白淵には漢民族意識が強かった。柳書琴は「王白淵の民族的アイデンティティーは血縁を本位とし、漢民族アイデンティティーを内円、国民革命によって成立した（五族共和）中国を外円とし、東洋の衰弱民族、さらに世界全ての弱小民族に広がる多層構造となっている」と論じている⁵²。

彼の漢民族意識が端的に現れているのは、1927年6月、『台湾民報』に掲載された「吾們青年的覺悟」である⁵³。その中では以下のように述べられている。

振り返ってわれらの民族の現状をみるに、一日たりとも嘆かない日はない、ひとときたりとも憤慨しないときはない。籠の中の鳥はなおも空中に飛び上がる志がある。われらが靈長類の頂点に立ち、漢民族の後代として、四千年の文化を受け継いでいることは、光栄の極みといえるだろう。（中略）われらは圧迫されている民族である。この百年以来われらが受けてきた侮辱は筆舌に尽くしがたい。われらの歴史を振り返るに、唐、宋、元代、われらは最も文明的で最も強大な民族であった。われらの文化は世界に冠絶していた。民族の無力はわれら青年の責任である。われらの眼前にある最大の問題は、われらの面目を回復し、われら同胞の生活を整頓し、進取の気概を養い、それをもって圧迫される地位から脱出することである⁵⁴。

最初に「われら民族」は四千年の文化を受け継いでいる漢民族であると述べて、その後に唐、宋、元を挙げたところには、五族共和の中華民族思想の影響が見られる。この一文において、王白淵がいう「われら青年」とは、漢民族・中華民族の青年を指しているといえよう。

王白淵が中国革命に強い関心を抱いたのには、同じ漢民族であるという思い入れのほか、以下のような思いも含まれていた。

鄭氏三代はただ数十年続いたのみに過ぎず、台湾も漢民族の運命に従って、満清に征服された。しかし清朝が倒された後にもなお、台湾は異民族に統制されている。私はいつも中国が進歩せず、私たちを異民族の手の中に留まらせていたままにしていることを嘆いている⁵⁵。

祖国の漢民族は満族の清朝を倒したのに、台湾人はまだ異民族である日本人に統治されている。王白淵は中国が強くなれば、台湾も異民族の統治を免れるという希望を持ち、中国の奮起を強く願っていたのである。のち王白淵が上海に渡り、中国の抗日運動に身を投じたのには、このような考えがあったからであろう。

王白淵は更に、台湾と同じ植民地であるインドの独立運動に強い関心と共感を示した。彼はまずインド独立運動の英雄であるガンジーに賛同を寄せた。「吾們青年的覺悟」では、「私は東京にいた頃、ガンジーの伝記とその受難の原理を読み、ガンジーの内心の苦痛をよく理解した」と記している⁵⁶。のち『棘の道』に収録されることになる「ガンジーと印度の独立運動」の結論の部分には以下のような一文が書かれている。

印度の青年よ！吾等は声高く卿等に呼びかける。亜細亜における最善なる魂は凡て諸君の味方である。支那の革命青年は同時に卿等の同士である。三民主義に立脚せる孫文の大亜細亜主義は印度の独立運動を支那革命の延長と見てゐる。同じ亜細亜の兄弟なる日本の青年も

諸君の味方である。日英同盟の名のもとに英国の番犬を勤めた日本は過ぎ去ったのだ。吾等は青年である。青年は真理を愛し、正義を愛し、自由を欲する。親愛なる印度の青年よ！卿等が英帝国主義に対して最後の反抗を試みる時吾等は満腔の熱情と友愛とをもって諸君の聖戦に参加するであらう。アメリカの独立戦争に参加せるフランスの自由主義者のやうに——57。

「ガンジーと印度の独立運動」はガンジーの伝記であるが、王白淵はガンジーの生涯を語ることを通して、イギリスの帝国主義を批判し、間接的に日本の帝国主義を批判していると考えられる⁵⁸。また 1924 年、孫文が日本に「西洋の覇道の番犬となるか、東洋の王道の干城となるか」と問いつめたという、神戸で行った演説「大アジア問題」の影響も窺える⁵⁹。しかし「吾等は青年である」というのは、前述した漢民族の青年という意味ではなく、日本も含め、アジアの青年を指していると考えられる。真理と正義と自由を愛するアジアの青年はインドの味方であると謳ったのは、暗に、インドと同じ植民地である台湾の味方になるよう、日本の青年に訴えかけたと読み取ることができる。

ガンジーのほか、王白淵はタゴールに注目した。ラビンドラナート・タゴールは自身が英訳したアンソロジー『ギーターンジャリ』を以て、1913 年にアジア人として初のノーベル文学賞を受賞した。タゴールの受賞が発表された時、アメリカの新聞では、ノーベル賞が白人ではなくアジア人に与えられたことに抗議と批判の声があげられたという⁶⁰。アジアのほとんどが西洋大国の植民地となっていた時代において、この受賞は重大な意味を持ったといえるだろう。タゴールの伝記を著した K.クリパラニが「受賞の報はいたるところで驚きの衝撃をもって迎えられ、ラビンドラナートを一個の人間から一つの象徴的な存在に変えてしまった——すなわち、彼はいまアジアの潜在力とその間近い回生を西洋がいやがうえにも認めざるをえなくなったことへの、一つの象徴であった」と指摘した通り⁶¹、タゴールは当時、西洋に対抗する東洋の象徴となり、日本、中国にもその名を轟かせていた。中国では、1924 年梁啓超の招聘で中国に訪問し、北京大学のほか、各地で講演が行われた。日本では、1915 年に 10 冊以上のタゴール関連書籍が出版されるほどタゴールは注目されていたのである⁶²。

ちょうど王白淵が東京に来た翌年の 1924 年に、タゴールが三度目の訪日をした⁶³。タゴールの来日について、王白淵は以下のように述べている。

およそ民国 15 年初秋の頃だろう⁶⁴、インドの詩聖タゴールが日本に来た。官民ともに日本人が彼に寄せた歓待は、いまだかつてないものだったといえよう。そのとき私はすでに彼の詩と哲学を読んでおり、この東方主義⁶⁵の詩人を非常に敬慕していた⁶⁶。

タゴールは、1916 年に初めて日本を訪問した当初には熱狂的な歓迎を受けた。しかし、タゴールは日本での講演において、「西洋における征服と闘争を特質とする国家主義を、日本は模倣しつつある」という痛烈な警告を投げかけた。そのために、日本のタゴール熱は一気に冷水を浴び

せられてしまったのである⁶⁷。それでも、タゴールは日本に警鐘を鳴らし続け、その言葉は彼の思想に共感を持つ人々に勇気を与え続けた。王白淵はまさにその中の一人だったのである。

彼はタゴールの詩文を読み、政治思想、インドの哲学思想などを勉強した。そこから出発して、詩の創作にも興味を抱いた。それは当然タゴールの詩の魅力に惹かれたところもあるが、当時の彼が芸術の夢に疑問を持ち始めたのもその一因として考えられる。

以上見てきたように、王白淵は日本に来てから、日本、中国とインドの政治情勢に強い刺激を受けた。来る前に感じていた漠然とした苦悶が、次第に植民地の人間としての明確な覚醒へと変化したのである。画家になる夢の実現を目指して東京に来たものの、個人と台湾全体が不可分な運命で結ばれていると考えるようになった王白淵は、やがて画家の夢と社会運動——彼の言葉では「芸術」と「革命」——を二元相克的な難問として捉えて、深く苦悩するようになったのだ。

このような王白淵にとって、心の葛藤を表現するのに、苦悩の原因でもある絵画を用いることにためらいを感じることもあったのだろう。詩人タゴールへの傾倒が、その思想と哲学を表現する媒体である詩への注目につながり、自分の苦悩、思想と感情を、詩という道具を用いて描くことを試みるようになったと考えられる。それが王白淵が美術から文学へと踏み出したきっかけだったのではないか。

1925年10月に台湾糖業農民の抗争である二林事件が起こり、謝春木は東京高等師範の学業を中断し、『台湾民報』の台北支局に転任する形で台湾に戻り、援助活動を行いながら正式に島内の社会運動に参加した⁶⁸。しかし、王白淵は政治に目覚めたというものの、まだ芸術の道を完全にあきらめ社会運動に投身するまではできなかった。

1926年東京美術学校を卒業した彼は、美術教師として台湾で就職しようとしたが、それは実現できなかった⁶⁹。日本での就職も順調ではなかったが、12月に同級生今井退蔵のつながりでようやく岩手女子師範学校に就職したのである⁷⁰。

しかし美術教師になってからも、王白淵の苦悩は消えていない。彼は詩と論文を書き、心情を綴りながら考えを整理し、苦悩に対する答えを見つけようとした。そして、東京から盛岡時代までの心の葛藤を全て『棘の道』にまとめたのである。

同書の中に収録された「詩聖タゴール」（1927年作）において、王白淵はタゴールの言葉を引用した後、以下のように述べた。

人間の永久の幸福はあらゆるものを得ることではなくて自己より大なるものに凡てを捧げることである。自分より大なる思想に芸術に国家の理想に民族の将来に真理に神に自己の凡てを捧げることである。かかる生活は自我の外にある一層大なる者に対しての奉仕である。この意味に於てタゴールの哲学は生きた人生の宗教でありまた活動の福音でもある。彼は死んでも同様な人生を忌む⁷¹。

タゴールを論じたものではあるが、この叙述は王白淵が東京時代には見つけられなかった自分の人生に対する答えでもあるように読み取れる。王白淵は芸術と国家、民族は対立するものではないと思うようになった上、個人の夢を実現するより、全体の幸福のために自分の全てを捧げることには生の意義を見出した。彼は社会運動に本格的に関わろうと心に決めていたといえるだろう。

このように、東京での生活が王白淵を美術から文学、さらに政治へと導いたのである。

おわりに

以上、王白淵の東京留学について考察してきた。まず留学の経緯について、きっかけとなった本は工藤直太郎の『人間文化の出発』である可能性を提起し、内容の考察を行った。彼は当時のミレー・ブームの中で、ミレーへの憧憬を形成し、ミレーのような画家になる夢を抱いて、東京美術学校に入ったのである。

東京時代の王白淵は、最初は芸術の勉強に専念したものの、日本の社会環境から影響を受けざるをえなかった。中国革命とインド独立運動などに関心を寄せ、政治に目覚めたため、個人と全体の幸福を両立させることに困難を覚え、苦悩していた。来日以降の思考と心情を詩と論文に託したものが、王白淵の残した唯一の詩文集である『棘の道』となったのである。

本稿の以上のような考察を踏まえて、『棘の道』を解説し、さらに『棘の道』が当時東京にいた台湾留学生にどのような影響を与えたかを考察してゆくことが今後の課題となろう。

1931年に『棘の道』を出版したとき、王白淵は29歳だった。謝春木が寄せた序文には、次の一文がある。

君は卅歳の階段に踏み止つて、今静かに過去を見返して居る。過去卅年の清算で何か飛び出すであらうか。此の詩集は廿九段以下の現実であつた。而かも日本教育の忠実な反射鏡としての現実であつた。(略)君は此の詩集を清算薬として飲んで居る譯だ。君の真面目(しんめんもく)は此の清算した後の歩みでなければならぬ。(略)植民地に成長した我等は特に二重の荆棘の道を踏む譯だが、此を拂ふ方法は、只一つしかない。その途とは一体何だらうか。私は茲ではそれを明言しないが、我等は共に手を固く握り合つて此の荆棘の道を踏み別けて入らなければならぬ。私は信ずる。我が同胞は王君の悩みを悩み、且つ彼と同様に唯一救いの道を求めるであらうと⁷²。

この序文において、謝春木は王白淵に社会運動に参加するよう呼びかけ、王白淵及び台湾人読者に、自分の運命をより自覚すべきだと促したのである。

また、『棘の道』に込められた王白淵の思いをしっかりと汲み取っているのは、さすがに親友である謝春木だからこそといえよう。王白淵が東京に来てから絶えず苦悩してきた問題に対する思考はそこに帰結され、この本はまさに謝春木がいうように、王白淵が自分の人生を清算した結

果となった。それを薬として飲み込んだ王白淵は苦しみながらも、新たな必然の道に進むだろうと、謝春木は信じていたのである。

王白淵のその後の人生を見る限り、彼の期待は的外れではなかったといえよう。『蕨の道』を出した後、王白淵は社会運動のグループに参加し、人生最初の逮捕を経験した。そして 1933 年、王白淵は上海に渡り、東京留学以降十年にわたった日本での生活に終止符を打った。王白淵は画家になる夢から大きく外れ、社会運動に身を投じ始めたのである。

注

- 1 小川英子（毛燦英）、板谷栄城（英紀）「盛岡時代の王白淵について」『台湾文学の諸相』（緑蔭書房、1998年）42頁。
- 2 王白淵の逮捕歴は以下の通り。2回目は1937年上海で、日本軍に逮捕され台湾の監獄に移送された（1943年釈放）。3回目は1947年、台湾民主党的の成立及び228事件の関連で100日間入獄した。4回目は1950年、台湾共産党蔡孝乾案に巻き込まれ、2年ほど入獄した。5回目は1963年に11か月ほど入獄した。陳才崑「王白淵生平、著作簡表」『王白淵・荆棘的道路』（台湾、彰化県立文化中心、1995年6月）を参照。
- 3 台湾総督府警察沿革誌第二篇の復刊本『日本統治下の民族運動（下巻）——政治運動篇』（風林書房、1969年7月）53-55頁を参照。8月13日に発行された暫定的な機関誌であるニュース第1号には、「吾々は延いては台湾における正しいプロレタリア的文化組織の結成を促進し、助成するであらう」という一文がある。
- 4 柳書琴「荆棘之道・旅日青年の文学活動與文化抗争——以『福爾摩沙』系統作家為中心」（国立清華大学博士論文2001年7月）第4章第2節を参照。
- 5 陳芳明「日抛時期台湾新詩遺產的重估」『左翼台湾』（台湾、麦田出版社、1998年）を参照。
- 6 柳書琴、前掲論文。橋本恭子「尋找魂的故鄉：王白淵日本時期的思想形成，以『荆棘之道』為主」（未公刊。清華大学中文研究所「日抛時代台湾詩人研究專題」報告。2000年 <http://ws.twl.ncku.edu.tw/hak-chia/k/kio-pun/ong-pek-ian.htm> に掲載された。最終アクセスは2007年9月）。
- 7 王白淵「我的回憶錄」（一）、（二）、（三）、（四）（『政経報』第1巻第2号1945年11月10日、第1巻第3号11月25日、第1巻第4号12月10日、第2巻第1号1946年1月10日）。『蕨の道』は、河原功編『日本統治期台湾文学集成 18・台湾詩集』（緑蔭書房2003年4月）に収録されたものをテキストとする。
- 8 王白淵、前掲「我的回憶錄（三）——被分裂的民族」。以下原文。「那時候我偶然買到一部工藤好美氏的著作，名謂『人間文化的出發』一書。這個富有藝術天才的日本自由主義者，使我的人生決定了一個的方向。該書中的幾篇文章非常使我感激（中略）。殖民地——在被征服民族與帝國主義者的殘暴，不斷對立的社會，一切事業盡是操在日人之手。臺灣同胞根本沒有出路，智識階級都是一個一個變成高等遊民，只有學過醫學的人比較有一點出路而已。在這樣的歷史環境裡，我煩悶著抱恨著，結果想做一個臺灣的密列，站在象牙塔裡，過著我的一生。由此我開始研究油繪。一年後我亦感覺到有一點進步，社會人士亦認識我有相當的美術天資。因此我想到東京專問研究美術，（中略）結果竟做總督府的留學生到東京，進東京美術學校。誰知想做臺灣的密列的我，不但做不成，竟不能滿足美術，從美術到文學，從文學到政治，社會科學去了。由此我的半生充滿著苦悶，鬥爭和受難的生活」。
- 9 同上文。以下原文。「但是已經知道社會苦悶的我，不能在溫柔的家庭裡過著平凡的生活了……我內心的苦悶一天比一天深下去」。
- 10 同上文。以下原文。「我擔任第四年級的男學生，那時後我只有教育的熱情，天々快樂地工作，好々地和小孩子們玩，我好像很幸福似的。但是現實的社會告訴我，臺灣顯然有壓迫和被壓迫民族的存在，日本人和臺灣人的鴻溝——這不能消滅的對立，一天一天地在我的面前展開起來」。
- 11 謝春木、『蕨の道』の序文、1頁。

- 12 回想録が掲載されたのは1945年なので、一昨年は1943年を指していると考えられる。ちなみに、工藤好美は1944年に日本に帰った。
- 13 王白淵、前掲「我的回憶録(三)」。以下原文。「前年我在臺北碰到二十年前使我人生一大轉向的工藤好美先生，那時候他在臺北帝國大學擔任英文學助教授。聽說已來過十六年之久。有一次在宴席裡，我曾向他說：『工藤先生，我在二十年前讀過先生的大作『人間文化的出發』因此到東京研究藝術，就此以來曾受過很多的人生波折，我應該感謝你的，還是要怨恨你的？』他搖搖頭，笑一笑，只默默地並無發出一語」。
- 14 京文社出版。改訂版は『ウォオルタア・ペイタア』（岩波書店、1927年8月）。ちなみに何義麟は王白淵が読んだのは工藤好美のペイターを研究する著書であると論じている（何義麟『跨越国境線——近代台湾去殖民化之歷程』台湾、稻郷出版社、2006年、228頁）。書名は具体的にあげられていないが、たとえ『ペイタア研究』を指しているとしても、出版の時期を考えると可能性は低いだろう。
- 15 回想録の中で、王白淵は自分の入学年を民国14年（1925年）4月と記したが、『東京美術学校一覽』（大正12-14年）、大正14年9月1日「生徒及び特待生姓名」欄では王白淵の名前が図画師範科第三年にあるため、逆算すれば、入学は大正12年（1923年）である。大正15年版の『東京美術学校一覽』の「卒業生姓名」には、大正15年（1926年）3月卒業の欄に王白淵の名前が記されている。よって、王白淵の在学期間は1923年4月から1926年3月までと考えられる。現在のところ、東京美術学校には途中編入の制度があったかどうか不明だが、後述のように1924年6月タゴールが来日したとき、王白淵は日本にいたことから考えても、それ以後の1925年に入学したとは考えられない。回想録での記述は、王白淵の記憶違い、もしくは民国暦と西暦の換算の間違いだと考えられる。
- 16 王白淵、前掲「我的回憶録(三)」。以下原文。「該書中の幾篇文章非常使我感激。原始的夢——這理性以前的世界，混沌底生命感，未分歧的人生，使我了解藝術的祕密，更叫醒我未發的藝術意欲。杜斯杜要扶斯基的人間苦一篇，使我了解人生二元世界的存在，精神和物質，永生和死滅，基督教思想和希臘思想的對立。因此我的內心亦顯然地感觸到這樣人生二元的相剋。密列禮讚一篇，竟使我人生重大底轉向，這當然是我母親遺傳給我的美術素質使其然，但是密列——這一位偉大底法國近世畫家清高的一生，非常使我感激之故」。
- 17 1917-21年に工藤直太郎は『六合雜誌』の編集を務めており、当時の雑誌に掲載された文章が本書に収録されている。内容の比較と分析は今後の課題とし、ここでは指摘に留めることにする。
- 18 参考のために目次を挙げる。第1章、人間文化の根本原理。第2章、文化発生の階段。第3章、人間愛と民衆生活。第4章、人間への思想。第5章、近代文化と唯物史観。第6章、私有財産の文化的考察。第7章、人格解放と社会主義。第8章、人間愛の宗教的根柢。第9章、近代自由主義の限界。第10章、社会的不安の諸原因。第11章、人間生活の二表現。第12章、文芸の社会的自覚と人道主義。第13章、文芸の民族的基調。第14章、仏蘭西文学と民族的復興。第15章、知識階級の貧民と人道主義。第16章、文芸上の伝統主義。第17章、民衆煽動家と神秘煽動家。第18章、ユーモアと人間愛。第19章、ジャン・ジャック・ルソー。第20章、ドストエフスキーを憶ふ。第21章、霊愛の詩人エーツ。第22章、原始愛に生くる芸術。
- 19 筆者は『人間文化的出發』に含まれているキリスト教の思想は王白淵に影響を与え、『蕨の道』の詩にそれが反映されている上、表紙にある十字架のデザインとの関連もあると考えている。この点についてはまた別稿で論じることにしたい。
- 20 羅秀芝『台湾美術評論全集／王白淵卷』（芸術家出版社、1999年）34頁。以下原文。「曾經被指控為社會主義者的畫家米勒（Jean Francois Millet, 1814-75），其作品中描繪的農家生活，呈現出具有高度精神性的不朽特質，以及略帶古典的牧歌情懷，讓身處殖民地的年輕人極容易找到共鳴點。當時的另一位臺灣青年洪瑞麟也對米勒的作品十分傾心，甚至照著當時流通的畫冊，臨摹了一張素描「米勒素描摹寫」（略）。雖然已經看不到王白淵當時的習作，然而藉著1924年洪瑞麟的這件素描，或許可以揣想王白淵類似地對米勒的認同心情」。羅秀芝はほかに三つの可能性を挙げている。一つ目は、王白淵は自分が母親の美術才能を受け継いだと考えていたこと。二つ目は台湾の苦悶に満ちた現実が彼の内心に潜む芸術意欲を呼び起こしたこと。三つ目は黄土水が第二回帝展に入選したことによって、美術現象が盛んになったこと。同書30-32頁。
- 21 工部美術学校の教授として来日したイタリア人画家アントニオ・フォンタネージ（Antonio

- Fontanesi) による。鷹野吉章「ミレーと日本 作品受容を中心に」（『三彩』527 卷、三彩社 1991 年 8 月）を参照。
- 22 鷹野吉章、同上文を参照。
- 23 同上文、30 頁。
- 24 アルフレッド・サンズィエ著、井出洋一郎監訳『ミレーの生涯』（講談社、1998 年 10 月）のまえがきとあとがきを参照。
- 25 Helena de Kay Gilder によって、"Jean-François Millet : Peasant and Painter" との書名で刊行された。同上書、328 頁を参照。
- 26 井出洋一郎、前掲書、329 頁。
- 27 同上注。
- 28 井出洋一郎は、「ロマン・ロランのミレー伝は、1914 年森口多里によって初訳されて以来、我が国ではなんと四種六度世に出ており、岩波文庫版は 1939 年に初版が出てから今日（引用者注：1998 年）まで、というロング・セラーになっている（中略）。日本人は中でも最も激越な理想主義的ミレー観を、このように長く愛し続けてきた。私たちにしみついたこの『ミレー神話』は容易に拭い去れないことがわかる」と論じている。井出洋一郎、前掲書、330 頁。
- 29 『有島武郎全集』（東京叢文閣、1924 年 4 月）第 2 巻所収を参考にした。
- 30 同上書、91 頁。
- 31 同上書、119 頁。
- 32 同上書、125 頁。
- 33 内田真木「有島武郎とミレー —— 評論『ミレー礼讃』の成立について」『有島武郎と西洋』（右文書院、1996 年）を参照。
- 34 同上文、128 頁。
- 35 磯崎康彦、吉田千鶴子『東京美術学校の歴史』（日本文教出版株式会社発行、1977 年 7 月）によると、大正 12 年（1923 年）5 月に文部省令第 25 号を以て、美校の規程と規則の改正が行われた。特に図画師範科に関しては、いままで制度上「東京美術学校規程」の枠外に置かれていたが、美校規程に組み入れられ、学科目に「心理学」と「色彩学」を加え、受験資格の年齢制限が撤廃されるなどの改正が行われた。同書 213-218 頁。
- 36 『東京美術学校一覧』（東京美術学校、大正 12-14 年版）、「東京美術学校規程」第 10 条、「図画師範科規程」第 38 条。
- 37 同上書「図画師範科規程」第 41 条。
- 38 同上書「東京美術学校外国学生特別入学規程細則」第 1 条。
- 39 王白淵、前掲「我的回憶錄（四）——象牙塔裡之美夢」。
- 40 同上文。以下原文。「那正櫻花將落的時候。美術學校在上野公園裡，和東京音樂學校相隔壁。這兩個藝術殿堂，均在東京高臺上，草木幽翠的公園裡。這非常使我滿意。（略）東京竟是一個好地方，不愧世界五大都市之一。文化當然比臺灣高得很，但是使我特別滿意者，就是生活的自由和研究的自由。（中略）一到東京，亦難免日本警察，無形中的監視，但是沒有臺灣那樣厲害。天天做一塊的日本人，亦沒有殖民地的日人那樣，野郎自大的鬼臉。我感著日人的可親可愛，更感著日本的文化，有媚人的地方。我天天很規矩地上課，只研究美術」。
- 41 前掲『東京美術学校一覧』、28 頁。
- 42 同上書、84 頁。
- 43 同上書、85 頁
- 44 小川英子、板谷栄城、前掲論文、羅秀芝、前掲書を参照。
- 45 王白淵、前掲「我的回憶錄（四）」。以下原文。「但是經過不久之後，我的眼光開了。周圍的環境，世界的潮流，特別是中國革命和印度的獨立運動，使我不能泯滅的民族意識，猛烈地高漲起來。藝術——這萬人懷念不絕的美夢，從此亦不能滿足我內心的要求了。象牙塔裡的美夢，當然是人生的理想，又是多情多感的我所好。但是一個民族屈在異族之下，而過著馬牛生活的時候，無論任何人都不能因自己的幸福和利害而逃避這個歷史的悲劇。我這樣想這樣對自己的良心過問。由此我天天到上野圖書館去，想研究這個問題的根本解決。但是我亦不能離開了藝術。那魅人的仙妖，好像毒蛇一樣不斷地蠕蠕在我的心頭。藝術與革命——這兩條路有不能兩立似的，站在我的面前」。
- 46 謝春木、前掲『棘の道』の序文、1 頁。

- 47 王白淵、「我的回憶錄（一）」を参照。
- 48 王白淵、前掲「我的回憶錄（三）」。以下原文。「蔣渭水先生（這一位民族的先覺者，他決是臺灣民族的英雄，他到死只為大眾，一點沒有軟化，一點都不妥協）領導的初期文化協會，確實叫醒了許多被壓迫的大眾（中略）。我非常同情他們的心志，特別欽服蔣先生的為人，然不加入他們的運動」。王白淵が文化協會の活動に参加しなかったことについて、羅秀芝は「王白淵は中南部にいたため、北部を中心とする活動に参加しにくかった。あるいは彼の親友、つまり社会意識がより強い謝春木がすでに 1921 年 4 月に東京高等師範に進学していたため、有力な同志を欠いていたからかもしれない」と推論した（羅秀芝前掲書、29 頁）。筆者はこのような可能性を否定しないが、何よりも当時の王白淵はまだ運動に参加するほど政治に関心を持っていなかったことが原因だと考える。
- 49 大正末期の日本社会状況における影響については、橋本恭子前掲論文を参考にした。
- 50 磯崎康彦、吉田千鶴子、前掲書、223-225 頁。
- 51 日本大正時期の社会状況に関しては、成田龍一『大正デモクラシー』（岩波書店、2007 年 4 月）を参考にした。
- 52 柳書琴、前掲論文、90-91 頁。
- 53 『台湾民報』第 163 号、1927 年 6 月 26 日。
- 54 以下原文。「回看吾們民族的現狀。無一日不嘆息。無一時不憤慨。籠中之鳥尚有飛上空中之志。吾們身居靈長之榮。受於漢族之後。相續四千年文化。算是光榮之極。（中略）吾們是受壓迫的民族。自一百多年以來吾們所受的侮辱是至極。翻看吾們的歷史。像唐、宋、元等的時候。吾們是最文明最強盛的民族。吾們的文化是貫絕世界。（中略）民族的無力是吾們青年的責任。吾們眼前最大的問題。是回復吾們的面目。整頓吾們同胞的生活。養成進取的氣象。以脫離受壓迫的地位」。
- 55 王白淵、前掲「我的回憶錄（四）」。以下原文。「鄭氏三代不過幾十年，臺灣亦跟著漢民族的命運，被滿清而征服。然而清朝被推翻後，臺灣還是留在異族控制之下。我常常嘆氣，嘆著中國的不長進，長使我們留在異族之手」。
- 56 以下原文。「余在東京的時候，讀甘地的傳記與受難的原理，深知甘地的心中痛苦」。
- 57 王白淵、前掲『棘の道』151-152 頁。
- 58 小川英子、板谷栄城、前掲論文、29 頁を参照。
- 59 成田龍一、前掲書、162 頁。
- 60 K.クリパラーニ著、森本達雄訳『タゴールの生涯（上）』第三文明社、1978 年、231-232 頁を参照。
- 61 同上書、235-236 頁。
- 62 日本国会図書館の目録によると、大正 4 年（1915 年）に出版されたタゴール関連の書物は 11 冊にのぼる。
- 63 タゴールは合わせて 5 回訪日した。1 回目は 1916 年、5 月末から 9 月初めまで。2 回目は 1917 年 2 月、アメリカ訪問の帰路に横浜を訪れた。3 回目は 1924 年 6 月、4 回目は 1929 年 3 月、5 回目は同年の 5 月、一か月ほど滞在している。我妻和男『タゴール』（講談社、1981 年 7 月）6 頁を参照。
- 64 タゴールが民国 15 年（1926 年）に來日した記録はない。この記述は王白淵の記憶違い、あるいは民国暦と西暦の換算の間違いによると思われる。注 15 を参照。
- 65 柳書琴によると、王白淵がいう「東方主義」とは、タゴールなどの思想家による東洋文明論の謂であり、それは東洋文明と東洋の価値を肯定、発揚するものである。前掲論文、45 頁。
- 66 王白淵、前掲「我的回憶錄（四）」。以下原文。「我記得，大概是民國十五年的初秋，印度的詩聖泰戈爾到日本來，日本朝野對他的歡待，可說曾未有。那時候我已經讀過他的詩和哲學，非常敬慕這個東方主義的詩人」。
- 67 我妻和男、前掲書、13-21 頁及び K.クリパラーニ著、森本達雄訳『タゴールの生涯（下）』第三文明社、1979 年、270-271 頁を参考にした。
- 68 何義麟、前掲書、22 頁。
- 69 謝春木、前掲『棘の道』の序文、1 頁。
- 70 小川英子、板谷栄城、前掲論文、10-11 頁。
- 71 王白淵、前掲『棘の道』97 頁。
- 72 謝春木、前掲『棘の道』の序文、3 頁。